

言語ゲーム・規則・バックグラウンド

——ヴィトゲンシュタインをサールによって補完する試み——

宮 坂 和 男

(受付 2005 年 5 月 10 日)

1. は じ め に

後期のヴィトゲンシュタインが示した洞察には、もちろん重要なものがさまざまあるが、そのなかで、言葉の〈意味〉に関する論究を最重要のものと見なすことに、さしたる異論はないであろう。後期のヴィトゲンシュタインは、言葉が指示する対象や事柄を〈意味〉と見なす伝統的な見方に根本的な批判を加えて、〈意味〉を探究する際の新たな視角を提示してみせた。後期の代表作である『哲学探究』¹⁾の序盤部分を形成しているのは、このような新たな視座における意味探究にほかならない。

たとえば「赤」という語の意味は何かと問われれば、われわれは通常、赤い色を思い浮かべ、色のサンプル表のなかに具体的事例を探し当てようとするであろう。そして、「これが赤だ」と言って直接指差すことによって「赤」の意味を説明することができるのではないか。われわれの多くはこのような考え方を共有しており、『哲学探究』の冒頭でヴィトゲンシュタインが指摘しているように、アウグスティヌスのような偉大な精神さえその例外ではなかった。後期のヴィトゲンシュタインはこのような仕方での〈意味〉の説明が成り立たないことを示し、言語を哲学的に探究するための新たな視角を開いてみせたのである。

後期ヴィトゲンシュタインの探究は、日頃われわれを拘束しているこのような見方からの転換を迫るものであり、それゆえ言語考察に関する決定的な意義をもっていることは言うまでもない。

本稿は、ヴィトゲンシュタインの言語哲学の内容を検討し、その後、そこにJ・サールの概念を接続させようとするものである。本稿で検討されるのは、規則に従うことはいかにして可能かという、よく知られた問題である。したがって本稿の多くの部分は、すでによく知られた事柄を述べるのに費やされる。その後に私としては、この規則の問題にサールの「バツ

1) Wittgenstein, L., *Philosophische Untersuchungen*. 本稿で『哲学探究』から引用する際には、本文中で当該の節の番号を括弧内に示す。なお、訳文は原則として黒崎宏氏による次の邦訳書に基づいているが、文字使い等の都合から、かなりの部分を訳し変えている。

ヴィトゲンシュタイン (黒崎宏訳・解説)『哲学的探求』(産業図書, 1994年)。

クグラウンド」という概念によって答えることを試みたい。ヴィトゲンシュタインとサールを結びつけて論じることについては、両者が探究した問題や主張している事柄に重なる部分があるという以外に、特段の理由はない。後期ヴィトゲンシュタインの言語哲学は、いかなる言語論・言語考察も避けて通ることのできない根本的問題系に関わっており、その点で、どのような哲学者や言語論者と取り合わせることも可能であろう。本稿は、私がこれまでに知った限りでの議論を援用して言語哲学の問題について考え、その後、今後取り組んでゆべき課題を明らかにするという個人的目的のために書かれたものである。

2. 語の意味と家族的類似

ともあれ、『哲学探究』の序盤におけるヴィトゲンシュタインの探究の筋道を、必要な限りにおいて辿ってみなければならない。ヴィトゲンシュタインが例に挙げているのは、「五つの赤いリング」を購入しようとするケースである (§1)。この言葉が書かれた紙片を店員に渡して用件を伝えようとするとき、そこで実現する意味理解はどのようにして可能になっているのであろうか。

指差されたリングを「リング」の意味と見なすことは、まだ無理なく理解されるかもしれない。だがその場合、「五つ⁵⁾ (fünf)」という語はいかなる事物を指示することになるのだろうか。また「赤い (rot)」という語の意味については、どのように考えられるのであろうか。

「赤」の意味を問われれば、われわれの多くは、色の見本表のようなものを指し示すであろう。だが、このように赤の色見本を直接指差すという説明は、成功するとは限らない。われわれが色見本の〈形〉(例えば長方形)を指差していると、相手に理解されるかもしれないからである。〈色〉を指差す行為と〈形〉を指差す行為とは、現象的に区別がつかない。直接指差すという行為(直示)は、一見考えられるほど単純で明らかなものではないのである。

実際、われわれが何らかの色の名を確かめようとして、色見本を見ることは珍しいことではないであろう。このような場合の多くにおいては、さまざまな色見本は正方形や卵形のような形に統一されているのではないだろうか。色見本が示さなければならないのは〈色〉のあり様であり、見本の形が色によってさまざまに異なってしまうと、色見本としては非常に見にくいものになってしまうだろう。同じ形にそろえることによって、色見本は〈形〉のサンプルではなく〈色〉のサンプルとして機能するように作成されているのである。

だがこのような条件が整っても、まだ問題は残るであろう。われわれが〈色〉を指差しても、「右」「左」、「真ん中あたり」のような〈位置〉が指差されているように理解されてしまう可能性が排除されないからである。このように見てゆくと、結局のところ、「赤」という

語の意味を説明するためには、それ以前に、それが〈色〉の一つであることがあらかじめ知られていなければならないことが明らかになる。

直接的な指示は、一見思えるほど根本的で基礎的な行為ではない。それが成功するためには、それ以前にすでに一定の知識が共有されていなければならない。「赤」という語の意味を色見本によって説明するためには、相手がすでに〈色〉とは何かを知っており、それに属するものとして「白」、「青」、「黒」のような具体例があることを知っていなければならないのである。

このような問題の場面で、「赤」「白」「青」「黒」のような色が共通してもっている性質を取り出すことによって、「色とは何か」という問いに答えようとしたのが、ソクラテスとプラトンの哲学であった。このような探究の方向においては、いかなる具体的な色とも異なる〈色そのもの〉を見て取ることが要求される。だが、いかなる色とも異なる〈色そのもの〉(色のアイデア)とは、一体どのような存在者であろうか。プラトンのアイデア論は、このような求めがたい存在者を求めて格闘した探究の所産だと言うことができよう。

それに対してヴィトゲンシュタインは、〈色そのもの〉を求める探究の方向には向かわず、「赤」「白」「青」「黒」等々のような具体的な色を見る場面にとどまった。そして、これらのさまざまな色はともかく何らかの仕方で類似しており、類縁性をもったものとして〈色〉という同じ領域に属すと考えたのである。このように類似していること、類縁性をもつことを、ヴィトゲンシュタインは「家族的類似 (Familienähnlichkeit)」と呼んでいる。

同様の問題を、ヴィトゲンシュタインは数を例に挙げて検討している。「5」や「2」のような数字の意味を、指差された対象や事象によって説明しようとするれば、われわれはたちまち困難に陥るであろう。

「二つの木ノ実を指さして『これが「2」である』と言う数2の直示的定義は、完全に正確である。——しかし、では、如何にして人は2をそのように定義できるのか？ この直示的定義が与えられた人は、人が『2』で何を名指そうとしているかを、そのときは知らないのではないか。そして彼は、君が木ノ実のこの集まりを『2』と呼んでいるのだ、と思うかもしれない！」 (§28)

二つの木ノ実を指差して「これが『2』だ」と述べることによって、「2」という数の意味を示すことはできない。この場合、指示されているのは色かもしれないし、あるいは植物の種類かもしれない。「直示的定義は、いかなる場合にも、あれやこれやに解釈される可能性があるのである」 (§28)。

では、「2」の意味の説明が成功するのは、どのような場合であろうか。続くヴィトゲンシュ

タインの考察を辿ってみよう。

「おそらく人はこう言うであろう。2は、ただ『この数が「2」である』というようにしてのみ、直示的に定義されえるのだと。なぜなら、この直示的定義では、『数』という語が、言葉の——文法の——どの場所に『2』という語を置くべきなのかを知らせるからである。しかしこのことは、この直示的定義が理解されるのに先立って、『数』という語が説明されていなくてはならないということを意味している。」 (§ 29)

われわれがはじめて「2」の意味を教えられるとき、何か指差されることはもちろん十分考えられることである。ただ、このようにして「2」の意味が理解されるとしても、その場合、それが数であることが同時に知られるのでなければならないのである。そうでなければ、何かを指差しながら「2」という語を発せられても、「2」によって何が直示されているのか分からないであろう。直示によって意味が純粹にそれだけで指示されるということはいえないのである。

ここで、われわれは「数とは何か」を同時に知らなければならないという困難な問題に逢着する。この問題は、またしてもソクラテス・プラトンの探究を誘発するものにほかならない。この探究の道筋に従えば、「2」や「5」といった具体的ないかなる数とも異なる〈数そのもの〉(数のアイデア)を指差すことができなければならない。

ヴァイトゲンシュタインはここでもソクラテス・プラトンの探究の道を避け、アイデアの世界に飛翔せずに「ざらざらした大地」 (§ 107) にとどまろうとする。(『哲学探究』のヴァイトゲンシュタインの考察には、このようなソクラテス・プラトンの問いの無意味さを仄めかさ言及が数多く散見される。) このような実地の経験の水準にとどまることによって示されるのは、やはり「家族的類似」という概念にほかならない。

実際の経験においては、「数とは何か」という困難な問いに対する直截的な答えが与えられることはない。実地の経験においては、この問いが意識されることはなく、「2」「5」「7」「10」のような個々の具体的な数字が見られるだけであろう。そして、さまざまな具体的な数は、互いに何か似たものとしてある領域を形成すると見なされるのである。

「例えばいろいろな種類の数——基数、序数、自然数、整数、有理数、無理数、実数、虚数、複素数、等々——も、一つの家族を構成しているのである。では、なぜわれわれは或るものを数と呼ぶのか？ それは、その或るものが、人がこれまで数と呼んできた多くのものと、或る——直接的な——類縁性を持っているからである。そして、このことによってその或るものは、われわれが数と呼ぶ他のものと、ある——間接的な——類

縁性を持つのである——と言えよう。そして、このようにしてわれわれは、われわれの数の概念を拡張するのである。それはちょうど、われわれが糸を縫る際に、繊維と繊維を縫り合わせるのに似ている。」 (§ 67)

ヴァイトゲンシュタインが語の〈意味〉をその「使用 (Gebrauch)」に帰着させたことはよく知られている²⁾が、このことも、実は「家族的類似」に立ち帰ることを意味するものにほかならない。ヴァイトゲンシュタインの考えを正しく理解するためには、「語の意味とは言語におけるその使用である」(『哲学探究』第43節)という簡略にすぎる規定に着目するよりも、むしろ次のような箇所¹⁾に注意が払われるべきであろう。

「『数』という語が2の直示的定義に必要か否かは、『数』という語が無くては、彼がその直示的定義を、私が望むのとは異なって把握してしまうか否かということにかかっている。そして、もちろんこのことは、その直示的定義が与えられる状況と、与えられる相手に依存している。(改行)そして、いかに彼がその説明を『把握』したかは、いかに彼がその説明された語を用いる (Gebrauch machen) かということに示されるのである。」(強調引用者, § 29)

上の箇所¹⁾に明らかなように、ヴァイトゲンシュタインの言う「使用 (Gebrauch)」とは、「2」という語が理解される以前に、それがあらかじめ「数」として用いられることを意味している。「2」という語の意味を理解するためには、それが「数」として〈使用〉されていることをすでに知っていなければならない。そしてこのことは、「家族的類似」によって数の領域が形成されることによって可能になっているのである。

言語のこのような「使用」は、日常生活における他のさまざまな基礎的活動と絡み合うことによってはじめて可能になっている。そしてわれわれの言語活動は、このような他の活動との絡み合いを通じて、生活における最根底の実践的地盤を形成している。このことを表すのが、「言語ゲーム (Sprachspiel)」という概念にほかならない。それは「言語とそれが織り込まれる行為の全体」 (§ 7) を意味している。

そして、「言語ゲーム」という概念を理解するためには、この概念自体が「家族的類似」によって説明されることに注意しなければならない。「言語ゲーム」という言葉にはじめて

2) 『哲学探究』の第43節で「語の意味とは言語におけるその使用である」と言われていることはよく知られているが、この規定は簡略にすぎるため、これによってのみヴァイトゲンシュタインの考えを正確に知ることは難しい。邦訳者の黒崎宏氏が注釈で指摘しているように(前掲邦訳書34頁)、この規定は、さらに明らかになければならない問題を幾つか含んでいるために、むしろ言葉足らずで不適切な規定になっていると言うことができよう。

接する人は、思わず「それは何か」と問うであろう。だが、このように問われることをあらかじめ想定しているヴィトゲンシュタインは、またしてもこのソクラテス・プラトンの問いを無効なものとして退ける (§ 65)。われわれの生活の基礎を形成する多様な言語活動が「ゲーム」と呼ばれることは、そこに共通している本質的特徴(アイデア)を見て取ることによって理解されるのではなく、他のさまざまなゲームとの類似によって理解されなければならないのである。

「ゲーム」には、野球やサッカー、バスケットボールなどの球技もあれば、チェスや将棋のような盤ゲームもあるし、またトランプや花札のようなカード・ゲームもある。「言語ゲーム」という概念を理解するためには、われわれの言語活動とこれらのゲームとの類似を見て取らなければならないのである。

いくつかのゲームを見ると、そこには勝ち負けがつくという共通点があるように見えるかもしれない。だがその場合、キャッチボールをすることや、サッカーボールを蹴って壁にぶつけることを繰り返す行為は、「ゲーム」から排除されてしまう。しかし、勝ち負けはつかないにもかかわらず、これらの行為には球技との類似を感じさせるものがあり、われわれはこれらを「ゲーム」と呼びたくなるのではないか。(“Spiel”というドイツ語には「遊び」という意味が含まれていることを、われわれは思い起こすべきであろう。)このように通覧してゆくと、諸々のゲームに共通して存在していると思われる特徴はさまざまに入れ替わり、一度取り出されたかに思われる特徴は次々に消え去って行ってしまう。しかしこれらには何かしら類似があるため、われわれはこれらを「ゲーム」という領域に括り入れるのである。

「ゲームが一般に有する特徴がいかに多く消え去っていることか。このようにしてわれわれは、ゲームの実にさまざまな集まりを通過することができる。そしてわれわれは、それらにおいて類似性が現れては消えるのを見るのである。(改行)そしていまや、これらの考察の成果は次のようである。さまざまなゲームを順次見てゆくと、われわれはそこに、相互に重なりあい交差しあう種々の——そして、大きなあるいは小さな——類似性の、複雑な網状組織を見るのである。」 (§ 66)

このように「言語ゲーム」は、明確な特徴によっては説明されえないものであり、その点で、不定形で模糊たるものを思わせる概念である。

3. 規 則

「言語ゲーム」をこのように規定しがたいものとして示すなかで、その要素としてヴィト

ゲンシュタインが重点的に考察しているのが、「規則」という事柄である。たしかに、多くの「ゲーム」について、規則に基づいて行為が反復されるという特徴を挙げることができよう。野球では、ピッチャーとバッターが交替で同様の行為を繰り返す。またサッカーでは、ボールを蹴る行為が延々と反復される。

だがこのような反復に関しても、ヴィトゲンシュタインが主張していることは、むしろそれが曖昧なものである以外にないということである。反復と一言と言っても、それが意味することにはかなりの幅があり、どのような場合に反復が成り立っていると言えるかは、簡単には決定できない。野球ではプレイヤーの役割が細かく分けられて、投げる、打つ、走る等の行為が入り組んだ仕方で反復されるのに対して、サッカーではほとんどのプレイヤーがボールを蹴り続けるという違いがある。

規則に従った行為の反復という問題について考えるために、S・クリプキをはじめとする様々な論者が繰り返し取り上げてきた『哲学探究』第185節を、ここでも引用しよう。

「[1000までの範囲で「+2」の操作によって数列を構成する操作を、われわれはすでに学習者に教え込むことに成功したとしよう。] (改行) そこでわれわれはその学習者に、今度は……その数列を1000を越えて続けさせたとしよう。——そうしたら彼は、1000, 1004, 1008, 1012と書き始めたのである。(改行) そこでわれわれは彼にこう言う。『よく見てごらん、君は一体何をしているんだ!』——しかし彼はわれわれの言うことが理解できない。そこでわれわれはさらに言う。『君は、いいかね、2を加えなければならないのだ。君は数列をいかに書き始めたのか、よく見てごらん!』——彼は答える。『え! それでは、これは正しくないのか? 私は、1000, 1004, 1008, 1012と書かなければならないのだと思っていた』。——あるいは彼は、自分が書いたこの数列を指差して、『しかし私は、1000までと同じ仕方で先を続けたのだ!』と言うということも想定できる。」 (§ 185)

「+2」という規則に基づいて996, 998, 1000, 1004, 1008 ……という数列を書く人のケースである。われわれは、この人は「+2」という規則を間違っ理解していると言いたくなるであろう。1000を越えるとその人は「+4」の操作を行い、それが「+2」という規則に正しく従うことだと確信しているのである。だが、この人に対して「+2」の規則をもう一度説明して誤りを正そうとしても、それは不可能だとヴィトゲンシュタインは言う。上の箇所に続けてヴィトゲンシュタインは次のように述べている。

「ここで、『しかしそれでは君は……が見えないのか?』と言って——彼に、かつてわれ

われが彼に1000までの範囲で与えた説明と事例を繰り返しても——何の役にも立たないであろう。このような場合には、われわれは、例えばこう言うかもしれない。生まれつきこの人は、われわれがしたような説明では『+2』という命令を、われわれが『1000までは2を、1000を越えて2000までは4を、2000を越えて3000までは6を、……、つねに加えよ』という命令を理解するように理解するのである。』（§185）

この人は自分のやり方が間違いなく規則に従っていると思い込んでいるため、すでに行われた説明を繰り返しても甲斐なく終わるというわけである。そもそも、未経験の新たな領域において規則を適用する結果を、すでに経験済みの結果によって確定することはできない。両者のあいだには埋めがたい深淵が横たわっており、そのあいだを飛び越えることは原理的に不可能である。

では、「+2」の規則が適用された結果として996, 998, 1000, 1002, 1004……という数列が正しいことは、どのように確定されるのであろうか。ヴァイトゲンシュタインの答えは、「教育と使用」による（§190）というものである。998, 1000, 1004, 1008……という数列を書く人に対してわれわれは、「とにかく違うのだ」と言いながら修正し、正しい数列を書くように教え込む以外にない。したがって規則に従うという行為は、共同体のなかで他者のチェックを通すことによってはじめて成り立つものであり、単独で規則に従うということはいえぬのである。

「われわれは次のように言うこともできる。『これらの人々は、皆が、「+2」という命令に対して、同じ段階で同じ移行をするように教育（訓練）されるのである。われわれはこのことを次のように表現することもできよう。これらの人々に対しては、「+2」という命令は、ある数から次の数への移行を完全に決定するのである。』（§189）

「したがって、『規則に従う』ということは、解釈ではなく実践なのである。そして、規則に従うと信じることは、規則に従うことではない。そして、それゆえ人は規則に『私的に』従うことはできない。なぜなら、そうでないと、規則に従うと信じるのが、規則に従うことと同じことになろうから。』（§202）

言語における規則の問題は、われわれに多くの困惑を突きつけ、さまざまな考察を迫るものにほかならない。共同体の生活のなかで否応なく従うことを強いる点では、規則は非常に大きな力をもってわれわれを拘束してくる。だが同時に、最終的には基礎をもっておらず、底が抜けているという点では、規則は曖昧模糊のものである以外にない。『哲学探究』にお

けるヴィトゲンシュタインの考察も、この両極のあいだを揺れ動いているように見える。

そしてこのような動揺は、同じ動作を反復させることはいかにして可能かという問題について考察されるとき、最も尖鋭化しているように思われる。一方においてヴィトゲンシュタインが強調しているのは、「規則に従う」動作は、当然のことに反復されなければならないということである。

「われわれが『規則に従う』と呼ぶものは、ただ一人の人がその人生においてただ一度だけでも行うことができる何かでありうるだろうか？ [ありえない。] (中略・改行) ただ一人の人がただ1回だけある規則に従った、ということはいえぬ。ただ1回だけある報告が行われたとか、ある命令が与えられたとか、理解されたといったことはありえない。——規則に従うということ、報告をするということ、命令を与えるということ、チェスをするということ、これらは慣習（恒常的使用，制度）である。」 (§ 199)

だが何かを反復することは、実際のところどの程度可能であり、どの程度実現しているのだろうか。そもそも何かは正確に反復されることはありえるのであろうか。ありえるとしても、どのようにして確かめられるのであろうか。われわれはほぼ毎日「すみません」と発言する機会をもつであろうが、物理音として見れば、発言する人によって、発言される度に異なる音が発せられているはずである。またこの発言は、発言される場面や文脈によって、問いかげ、依頼、謝罪など様々に異なった事柄を意味している。反復は純粋に実現することはない。反復という現象は一見考えられるほど簡単ではないのである。

また野球のような球技について考えてみると、そこでは確かにピッチング、キャッチング、バッティングのような動きが反復されている。だがこの場合プレイヤーは、絶えず新たな局面にぶつかり、絶えずはじめての状況を通過しながら動きを反復させているのであり、ピッチャーのボールがまったく同じコースに来たり、打球が同じ場所に飛ぶといったことは起きない。

このように絶えず新たな局面や場面に遭遇するということは、チェスや将棋のような盤ゲームについても指摘されうるであろう。このことに着目するとき、規則が改変される場合もあるということに注意しなければならないはずである。それまで経験されなかった新たな事態に対処するために、ゲームを構成する規則を改変する必要があるが生じるのである。この改変が最も大規模で起こるのは、規則が全面的に変えられて新たなゲームが出現する場合である。それが十分起こりえることを、ヴィトゲンシュタインは明言している。

「実際のところ、たとえば私は、誰にも決してやってももらえないあるゲームを考え出す

ことができる。」 (§ 204)

ここまで見られたところからも明らかなように、ヴィトゲンシュタインは、規則に従った行為の反復を、一方で不可欠なものとして重視すると同時に、もう一方で、この反復が差異を伴った曖昧なものであることを主張している。ここには何やらおさまりの悪い揺らぎが生じているとすることができる。

この揺らぎについては、次のように整理することができよう。すなわちヴィトゲンシュタインは、規則に従うためには行動や動作を反復することが不可欠だと考えているが、反復を、正確に同じ行動や動作を繰り返すこととしては考えていないのである。実際の行動や動作の反復においては、かなりの振幅をもって異なったものが繰り返される。先にわれわれは「ただ一人の人がただ1回だけある規則に従った、ということはありません。ただ1回だけある報告が行われたとか、ある命令が与えられたとか、理解されたといったことはありません」 (§ 199) という箇所を見たが、これは誤解を招きやすいものであり、われわれは注意を払う必要がある。一見したところこの箇所は、ある同じ内容が何度も繰り返し報告されたり、ある同じ命令が何度も繰り返されることを言っているかのように見えるからである。だが、注意して読み返せば分かるように、ヴィトゲンシュタインは、さまざまな機会にさまざまな内容が告げ知らされるなかで報告という行為が成立すること、さまざまな機会にさまざまな命令が下される仕方である命令という行為が成り立つことを述べているのである。このことを銘記するためには、次のような箇所が参照されるべきであろう。

「毎日『明日君に会いましょう』と約束する人は、——毎日同じことを言っているのか。それとも、毎日別のことを言っているのか。」 (§ 226)

「『もし彼がそのつど別のことをしたならば、われわれは、彼はある一つの原則に従っているとは言わないであろう』と述べることに、意味があるのだろうか。このように述べることには意味がない。」 (§ 227)

ヴィトゲンシュタインは、このような反復に対しても「家族的類似」という概念を適用すべきだったと思われる。少なからぬ差異を含みながらも同じものとして繰り返されることを示すのに、「家族的類似」以上に適した概念はないであろう。さまざまな行為や動作が、一回的な出来事としては異なっているにもかかわらず、説明しがたい類似をもったものとして、同種の行為や動作と見なされるのである。なおヴィトゲンシュタインは、このことを示すのに「相貌 (Gesicht)」という言葉を用いている (§ 228)。類似した行為や動作は顔つき

が似ているということである。

出来事と反復ということについては、もう少し述べておかなければならない。というのは、ヴィトゲンシュタインは『哲学探究』のなかで、言葉が反復的に「使用」されるのとは異なる仕方で意味理解が成り立つことに、時に言及するからである。次のような箇所ではヴィトゲンシュタインは、発言が一回的な出来事として成り立つことを述べているように見える。

「さてしかし、われわれがある語を聞くとき、あるいは、口に出して言うとき、われわれはその語の意味を理解する。われわれはその語の意味を一瞬の内に把握するのである。そしてわれわれがそのようにして一瞬の内に把握するものは、確かに時間的拡がりのある『使用』とは別の何かである。」 (§ 138)

ある人が「私は皇帝だ」と発言する場合を考えてみよう。誇大妄想狂の人がたった一度だけこのように叫ぶことは十分考えられる。この場合、この発言は一回的な出来事にほかならない。だが、これまで一度も発言されたことがなく、今後も反復されないにもかかわらず、われわれはこの発言の字義の意味を即座に、一瞬のうちに理解するであろう。

このような字義の意味の理解はいかにして可能になっているのであろうか。それは、統語論的・意味論的等の言語規則に従って発言が正しく構成されているがゆえに理解されるのである。だがこの場合、この発言が現実に反復されたか、今後実際に反復されるかということは問題にならない。発言の字義の意味が即座に可能となるのは、将来必要な場合には、反復され再現されることもできるように形態化されているからなのである。このような観点からすれば、『哲学探究』の次のような箇所が着目されるべきであろう。

「『あたかもわれわれは、語の全使用を一瞬のうちに把握することができるかのようである。』……奇妙なことがあるとすれば、それはわれわれが、その後の未来における使用が、何らかの仕方でその把握の行為のなかに現在すでに存在しなくてはならず、とはいえしかし、その未来における使用は、現在はもちろん存在していない、と考えるようにわれわれが導かれるときである。」 (§ 197)

ここでヴィトゲンシュタインが指摘しているのは、現在とは別に存在するはずの未来が何らかの仕方で現在に入り込んでいるという逆説的な事態である。言語における反復という問題について考えるとき、われわれは、発言が実際に反復されるという〈事実〉にではなく、将来反復されることもありえるという〈可能性〉に注目しなければならない。ヴィトゲンシュタインが本来指摘すべきだったのは、この《反復可能性》が、いまこの場における一回的

発言のなかに刻印されているということだったのである。

やや話が逸れるが、このことは、デリダの脱構築的哲学が明らかにしたことと重なっている³⁾。デリダはこのような事態を、現前性が非現前性によって「分割され、汚染され、寄生されている」⁴⁾ ことと呼んだ。現在において要請される現前性は、実は純粋なものとして実現することはなく、それが排除するはずの非現前性を固有の仕方を含んでいるのである。必要な場合には反復されることもあるという〈可能性〉によって刻印され形態化されていなければ、〈事実〉としての一回的発言も、一時の無秩序な雑音と変わらないものとなろう。

ここでデリダの脱構築の哲学について論じることは、紙幅が許さないため断念せざるをえないが、これまで見られてきた事柄のなかに、あらゆる言語哲学に関わる重大な問題系が存在していることは間違いない。本稿では次に、〈反復〉の問題について J・サールが論じていることを参照し、ヴィトゲンシュタインの探究をわれわれなりに補完することを試みたい⁵⁾。サールが「バックグラウンド」という概念によって明らかにしたことが、われわれに一定の見通しを与えるものとなっているからである。「バックグラウンド」という概念がいかなることを意味しているかは、以下で次第に明らかになってゆくであろう。

4. バックグラウンド

サールは『志向性』のなかで、「開く (open)」という語を含むさまざまな文を例示し、それらの文の字義の意味について考察している。「開く」という言葉が反復されるケースについてサールが論じているところを見、それを手がかりにして、規則における反復の問題について考えることにしよう。

サールは次のような例を挙げている⁶⁾。(ここではサールの説明をやや簡略なものに改変する。)

3) ヴィトゲンシュタインとデリダとを比較する作業は他日を期したい。なおこのテーマについて考察したものとしては、次のものがある。

H・ステーテン (高橋哲哉訳)『ヴィトゲンシュタインとデリダ』(産業図書, 1984年)

ステーテンの考察は大変に精緻で優れたものであるが、両者の類似を過剰に見出そうとする傾向が強く、私の見方はステーテンと必ずしも一致するものではない。特に同書の第2章の表題でステーテンは「ヴィトゲンシュタインは脱構築する」と述べているが、この表現は牽強附会なものだと言わざるをえない。

4) Derrida, J., *Limited Inc a b c*, in: id., *Limited Inc* (Gallée, 1990), p. 97. 高橋哲哉・増田一夫訳「有限責任会社 abc」, 『現代思想』臨時増刊「総特集=デリダ」(青土社, 1988年), 108頁。

5) 周知のようにサールはデリダと論争を戦わせたことがあり、デリダの論敵であったが、このことは本稿の内容とは関係がない。

6) Searle, J., *Intentionality* (Cambridge, 1983), pp. 145–6. 坂本百大監訳『志向性』(誠信書房, 1997年), 202–3頁。

トムはドアを開いた。

サリーは眼を開いた。

外科医は傷口を開いた。

議長は会議を開いた。

ビルはレストランを開いた。

これらの文の意味を、われわれはすべて即座に把握するであろう。サールは、これらの文の字義の意味は確定しているが、反復されている「開く (open)」という語の字義の意味は一定していないと考えている。「開く」という語は、文ごとに異なることを意味しているからである。

例えば、「ドアを開け」という命令を聞いて、外科用のメスでドアを切り開こうとした人がいたとしよう。この人は、「開く」という語の意味を正しく理解しているにもかかわらず、この命令の字義の意味の理解には失敗している。「開く」という同じ語が用いられても、「ドアを開く」と言う場合と「傷口を開く」と言う場合とでは、「開く」という語は異なる事柄を意味しているのである。このような簡単な事例においてすら、語の字義の意味は一定したのではなく、大きな揺らぎを含んでいる。

先にわれわれは、反復に対してこそ「家族的類似」という概念を適用するべきであろうと述べた。サールが挙げている例にヴァイトゲンシュタインの「家族的類似」を適用することによって、われわれは次のように言うことができよう。すなわち、「ドアを開く」、「目を開く」、「傷口を開く」……といった上記の例は、それぞれ異なった事柄を指し示しているが、われわれはこれらの事柄のなかに何らかの類似したものを見て取っているのである。それゆえわれわれは、これらをすべて「開く」という共通した言葉を用いて表現するのである。そしてすでに触れたように、この「家族的類似」を、これらすべてに共通する明確な特徴を指摘することによって説明することはできない。

また「ドア—開く」、「目—開く」、「傷口—開く」といった結びつきが成り立つからには、これらの両項のあいだには何らかの親近性・親和性 (Verwandschaft) のようなものがあると言えるのではないか。これに対して、「太陽を開く」とか「草を開く」のようなことを言っても、意味不明なものとしてしか見なされないのである。「太陽」や「草」は「開く」という行為と親近性をもたないからだと言うことができる。

あらためて考えれば、「傷口を開く」という発言を聞くとき、「ドアを開く」と言われるときと同じ言葉を通して理解することは、大変に不思議なことだと言いうことができる。「傷口を開く」という発言の意味を理解することは、一体どのようにして可能になっているのだろうか。「ドアを開く」という表現との類似に依るだけで、「傷口を開く」という発言の意味

を理解することは不可能であろう。「傷口を開く」という表現を習得するのは、それが実際に行われる現場をわれわれが体験するか、何らの仕方で見聞するときであろう。その際われわれは、どのような場合に、なぜこのようなことが行われるのか、どのような手順で皮膚を切り裂くのか、刃物としてはどのようなものを用いなければならないかなど、関連した無数の実践的知識や体験を得ることになる。「傷口を開く」という表現は、このような知識や体験を背景に保持することによって、はじめて理解されるのである。このような潜在的な知識や体験が、サールが「バックグラウンド (background)」と呼ぶものである。「ドアを開く」ときにも「傷口を開く」ときにも「開く」という語を使用するのは、両者のバックグラウンドに何らか共通する部分があるからである。

ではわれわれは、「傷口を開く」という発言が理解される仕組みを説明するためには、「バックグラウンド」の内容を明示する必要があるだろうか。それは、具体的にどのようにして、どの程度可能であろうか。これに対するサールの答えは、「バックグラウンド」を構成する知識や体験、能力等をすべて書き出すことは原理的に不可能だというものである。サールは、人がスキーを滑ることを習得するとき、最初は顕在的に言われた規則や知識が、次第にバックグラウンドに変容してゆく過程を例に挙げている。分かりやすい例なので、ここで辿っておくことにしよう⁷⁾。

スキーを滑ることを学ぼうとするとき、初心者はさまざまな指示を受けてそれに意識的に従おうとする。「前景姿勢をとれ」、「足首を曲げよ」、「谷足加重せよ」と言われ、それを実行しようとするわけである。だが初心者は、上達して自在にスキーを滑るようになったときには、もはやこの指示を思い出すことはない。彼はそれを意識することはもはやなく、とにかく上手に滑るのである。彼の身体の動きは自動化しており、規則に従っているという意識はもはやない。このような変化をサールは、「規則がバックグラウンドへ退く」⁸⁾ ことと呼んでいる。

このようにバックグラウンドに退いた知識や能力は、体の動きとして自動化してしまっているため、それを構成する諸部分を列記することはもはや不可能である。仮にこれらを列記して明示しようとするれば、われわれは体の動きをどこまでも分割しなければならなくなり、無限遡行に陥ってしまうであろう。

われわれの日常の生活は、このようにバックグラウンドに支えられた動作によって満たされているとすることができよう。歩行という日常の動作を考えてみても、たしかにそれを規則化された動きとして捉えることはできる。「まず右足を前方に出し、次に左足を前方に出す。その後同様に続ける」のようなものを歩行動作の規則として述べることは、差し当たっては

7) *Ibid.*, p. 150. 邦訳, 208-9頁。

8) *Ibid.*, p. 150. 邦訳, 209頁。

可能であろう。だが、骨折の怪我から回復しようとしているというような人を除けば、このような規則に意識的に従う人はまずいないであろう。規則を意識して正しく歩こうとするムカデは、次にどの足を動かせばよいか分からなくなって歩けなくなるという話がある。歩行という最も基礎的な動作をわれわれが行うとき、その規則はバックグラウンドとなって背景に退いているのである。

また、仮に歩行の規則を意識するとしても、規則に従うということは、一見思われるほど簡単なことではない。「右足を前方に出す」と言うことは簡単だが、われわれは実際には正確に「前方に」足を出すことはありえない。どの角度の範囲内であれば「前方」という規則を守ったことになるのであろうか。それを決定しようと思えば、そのための新たな規則をわれわれはさらに定めなければならなくなろう。

この「以下同様に続けよ」という指示については、もう少し検討しなければならない。この指示はいかなる規則にも必ず伴うものであり、それゆえ規則の最も重要な部分を占めるものにほかならないからである。これについてはヴィトゲンシュタインも考察を示しているので、その部分を引用しよう。

「例えば私は、命令に従って連続模様の先を『同様に (gleichmäßig)』 続けるように誰かを指導するであろう。(中略) それゆえ例えば、・・・の先を・・・と続けるよう、その人を指導するであろう。」 (§ 208)

問題は、・・・のように斑点模様を続けることが、「同様に続ける」ことになっているか否かである。このことはどのように決定されるのであろうか。これに対するヴィトゲンシュタインの答えは、「同様に続けている」と断言する根拠はありえず、また、根拠が存在する必要もないというものである。

「連続模様を自分でどのように続けるかを、私はいかにして知なのか。……根拠 (Gründe) はほどなくして尽きるであろう。そしてその後、私は根拠無しに行為するであろう。」 (§ 211)

「私が恐れているある人が私に、列を続けるようにという命令を与えるならば、私は直ちに完全な確信をもって行為するであろう。そして、根拠がないということが私を悩ますことはない。」 (§ 212)

「同様」であることの根拠を求めても、われわれは甲斐なく終わるのであろう。ひとつひとつ

つの斑点の大きさが等しいことや、斑点のあいだの間隔が等しいことを、われわれは確かめることができるであろうか。測定の精度をどこまで高めても、このことを真の意味で確かめることは、原理的にありえないであろう。そのようにして根拠をもたなくとも、われわれはつねに確信をもって連続模様を「同様に」続けてゆくことができるのである。

「同様に続ける」行為は、このように確信が伴うがゆえに自動化されることがある。それが、サールが「規則がバックグラウンドに退いた」と呼んだ状態にほかならない。先にも述べたように、歩いたりスキーをするとき、われわれは意識せずに規則に従い、難なく「同様に続ける」ことができるのである。

そして、同じことが言語活動に関しても指摘されうるであろう。発言を行ったり発言を理解するとき、われわれはそのつど変化表を参照して確かめることはない。われわれは規則に従うという意識をもたずに、自動化された能力によって発言を素早く構成することができ、また相手の発言を瞬時に理解することができる。このことは、われわれの言語活動がバックグラウンド化されている現象として理解されうるであろう。

この「バックグラウンド」という概念によってヴィトゲンシュタインの言語論を補完することは、大きな意味をもつと言うことができる。というのは、『哲学探究』のヴィトゲンシュタインは、時に「語が一瞬の内に把握されるように見える」現象に着目し、それが語の通常の「使用 (Gebrauch)」と異なることを認めかけているように見えるからである。(先に引用した138節で、ヴィトゲンシュタインは「それは『使用』とは別の何かである」と述べていた⁹⁾。

だが、発言を行ったり発言を聞くときに、一瞬の内に把握することができるのは、そこで「『使用』とは別の何か」が行われているからではない。このようにして把握される発言も規則に従ったものであり、言語ゲームと別のものではない。この場合には、言語活動が自動化されて瞬時のうちに行われるため、「規則に従っている」ようには見えなくなっているのである。考えてみれば、われわれの日常の言語活動は、むしろ、ほとんどこのような瞬時の理解によって成り立っていると言うことができる。

5. む す び

理解が一瞬のうちに実現して、規則に従っているという意識が希薄になるとき、語がそれ自体で何かを指示しているような錯覚が生じると考えられる。本稿の冒頭でも見られたように、この問題が、後期ヴィトゲンシュタインが言語を探究しはじめたときの出発点となった

9) 本稿53頁。

ものであった。語が何かの対象や事柄を指示しているという誤った見方は、われわれの多くを拘束しているものであり、そこから脱却する道を明示したという点で、ヴィトゲンシュタインの言語哲学はいまもって不朽の功績を示すものにほかならない。ヴィトゲンシュタインの著作や遺稿は、言語を哲学的に探究するために必要な洞察で満ちあふれており、われわれは今日でも、言語について思慮をめぐらそうとするとき、それらのなかに重要な導きの糸を見出すことができよう。

本稿でわれわれは、「バックグラウンド」というサールの概念によってヴィトゲンシュタインの洞察を補うことを試みた。言語活動が自動化しているという観点を補うことによって、『哲学探究』に見られる思考の動揺を幾分か整理することができると考えられたからである。なおサールは、このような自動化は、脳の神経経路が確立することによって実現すると考えている。規則に従った行為が反復されると、その行為を可能にする脳の神経回路が通じ、それによってこの行為の自動化が身体能力として実現するとサールは考えているのである¹⁰⁾。これが実際にそうであるか否かは、今日「心の哲学」と呼ばれる分野において検討されるべき課題と見られている。この問題について考えるためには、あらためて別途の論究を行うことが必要となろう。本稿では、この課題が見出されるまでの過程を跡づけることで満足し、筆を擱くことにしたい。

10) *Ibid.*, p. 150. 邦訳, 209頁。